

自問の言語表現に見られる配慮

—終助詞「かな」を中心に—

劉悦（りゅう えつ） 筑波大学大学院

1. はじめに

自問の言語表現は独話として捉えられることが多いが、聞き手への働きかけも可能であると池谷（2012）、櫻井（2015）などで指摘されている。池谷（2012）は、対話でも独話でも使える終助詞「っけ」の機能を、聞き手を何らかのアクションを起こす義務から解放し、聞き手への配慮を示すこととしている。また、櫻井（2015,p.78）は、終助詞「か、かあ、かなあ」について、「話者は知り得ない情報について自問形式で述べることで間接的な情報要求として機能」し、FTAを回避するためのストラテジーとして用いられると述べている。以上のように、コミュニケーションにおいて、自問の言語表現はただの自己表出にとどまらず、配慮を示しながら聞き手に働きかけることも可能である。そこで、本研究は自然会話コーパスの会話データを用い、自問によく使用される終助詞「かな」に着目し、その使用に見られる配慮のあり方を明らかにする。

2. 先行研究

林（2020）は、終助詞「かな」は自問としての側面が強いと述べている。自問であるゆえに、三宅（2011）は、通常の質問文より「かな」は文を柔らかくするという表現効果を指摘している。山下（2012）は、依頼場面に使用される「かな」の機能を考察し、「～てくれないかな」という依頼発話において、「かな」は回答要求性を低め、「話し手の意志をなるべくあらわにしない」（山下 2012,p.24）という配慮を示していると分析している。さらに、加藤（2015,p.38）においても、「かな」の応答要求性が言及されている。「独話的な形式を利用して聞き手への要求力を弱め、より柔らかい言い方にする」という「かな」の使い方について、加藤は「疑似独話」と名付けた。

一方、以上の分析に用いられた例文は作例と依頼場面の会話データであり、自然会話において「かな」はどのように使用されているかには触れられていない。自然会話のデータを用いて「かな」の用法を分析したものとして平山（2015）が挙げられる。平山（2015,pp.72-75）は、「BTSJ 日本語自然会話コーパス」の同世代友人同士の会話データから「かな」の用法を13種類に分類した。そのうち、「相手に影響を及ぼす自分の行為について述べる」、「相手と異なる主張を行う際に、自分の発話を和らげる」、「相手への批判を和らげる」、「相手への不同意を間接的に示す」という用法において、「かな」は相手への配慮を示しているとされている。しかし、ほかの用法において配慮の側面があるか、話す相手以外にほかの配慮対象があるか、「かな」の全貌を解明するには至っていない。なお、上記の先行研究はすべて「かな」の回答要求性の低さに言及しているが、ほかの表現効果があるかどうかについても議論の余地が残っている。

3. 研究方法

先行研究を踏まえ、本研究は『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス（2023年3月 NCRB 連

動 完成版』(以下、BTSJ)の会話データを調査資料とし、「かな」の使用実態における配慮の表れ方を分析する。具体的には、同性友人同士雑談(男男、女女)、同性初対面雑談(男男、女女)、異性友人同士雑談(男女)、異性初対面雑談(男女)、論文指導(教師男学生男、教師男学生女、教師女学生女)という5種類の対人関係の会話データ(計69会話、25時間32分34秒)を分析対象とする。会話参加者は全員、日本語母語話者である。

調査の手順は、まず、「かな」を含む発話文を抽出し、文脈情報を踏まえて各使用例の用法を確認する。そして、ポライトネスの原理(Leech 1983)とポライトネス理論(Brown & Levinson 1987)の枠組みを援用し、配慮表現の観点から「かな」の用法を考察する。

ポライトネスの原理は、Leech (1983)がまとめた対人コミュニケーション上の6つの行動原則(気配りの原則、寛大性の原則、是認の原則、謙遜の原則、合意の原則、共感の原則)である(表1を参照)。

表1 ポライトネスの原理 (Leech 1983 : 190 に基づいて筆者が作成)

	ポライトネスの原理
(A) 気配りの原則	他者に対する負担を最小限にせよ
	他者に対する利益を最大限にせよ
(B) 寛大性の原則	自己に対する利益を最小限にせよ
	自己に対する負担を最大限にせよ
(C) 是認の原則	他者の非難を最小限にせよ
	他者の賞賛を最大限にせよ
(D) 謙遜の原則	自己の賞賛を最小限にせよ
	自己の非難を最大限にせよ
(E) 合意の原則	自己と他者との意見の相違を最小限にせよ
	自己と他者との合意を最大限にせよ
(F) 共感の原則	自己と他者との反感を最小限にせよ
	自己と他者との共感を最大限にせよ

また、Brown & Levinson (1987)のポライトネス理論は、人間は誰でもネガティブ・フェイス(negative face、以下NF)とポジティブ・フェイス(positive face、以下PF)を持っていると想定している。前者は自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求であり、後者は他者に好かれる、褒められたい欲求を指している。さらに、フェイスを脅かす行為には「ポジティブ・ポライトネス」(positive politeness、以下PP)と「ネガティブ・ポライトネス」(negative politeness、以下NP)という2つの形の補償行為が伴う場合がある(Brown & Levinson 1987)。前者は聞き手のPF、後者は主として聞き手のNFへの配慮として捉えられる。

配慮表現の定義について、本研究は山岡(2015,p.318)の定義に従い、配慮表現を「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられ」、「一定程度以上に慣習化された言語表現」とする。

4. 分析と考察

BTSJ の会話データから、終助詞「かな」の使用例を 834 件抽出し、用法を分析して表 2 にまとめた。以下は、具体的な会話例を取り上げ、「かな」の使用に見られる配慮を見ていく。

表 2 「かな」の用法

カテゴリー	用法	使用件数	割合
問いかけ	自分自身に問いかける	123	14.7%
	回答を強制しない質問をする	70	8.4%
	困惑を示し、相手の回答を間接的に求める	13	1.6%
主張	主観的な考えを述べる	378	45.3%
	相手の意見を完全に受容することができない態度を間接的に示す	33	4.0%
叙述	客観的な事柄について、言い切れないことを述べる	148	17.7%
	間違っていた認識を述べる	16	1.9%
表出	行動の意向を示す	51	6.1%
	「自分の願望を表現する」(平山 2015、p.73)	2	0.2%
合計		834	100%

4.1 用法 1：自分自身に問いかける

断片 1 は、四年前の入学式の座席に関する会話である。JM015 は、当時の座る位置について、「どうだったかな」(825 行目)と話している。文字起こしのデータに「[消え入るような声で]」という補足情報があること、さらに、その発話の直後に話者 JM015 はまた「なんかね、あれからもう 4 年だよ」と自ら話を続けていることから、825 行目の発話を自問の呟きとして捉えられる。ここの「かな」は、相手への働きかけが弱く、配慮表現としての働きも弱い。

断片 1 同性友人同士雑談 (男男)、会話番号 008-01-JM015-JM016

行番号	話者	発話内容
823	JM016	<うん、お前この>{>}、こっちら辺だった気がする[「気がする」は小さくなっていく]。
824	JM015	うん。
825	JM015	<u>どうだったかな</u> [消え入るような声で]。
826	JM015	なんかね、あれからもう 4 年だよ<2 人で軽い笑い>。

4.2 用法 2：回答を強制しない質問をする

断片 2 は、主査と副査の先生に関する大学生友人同士のやりとりである。話者 JM015 は 578 行目の発話で「副査が、「人名 20」先生なのかな?」と自分の疑問を表出しているが、「かな」は独話の性質を持っているため、聞き手の JM016 はそれに答えられなくてもトラブルは生じない。質問の際に、応答を強く要求することは相手の NF を侵害するため、「かな」で相手への働きかけを和らげるのは、相手の他者に強制されたくないという NF への配慮として考えられる。つまり、質問に使用される終助詞「かな」は配慮表現として捉えられる。また、質問は相

手への負担であるため、「他者の負担を最小限にせよ」（リーチ 1983/1987,p.190）というポライトネスの原理もここで反映されている。

断片 2 同性友人同士雑談（男男）、会話番号 008-01-JM015-JM016

行番号	話者	発話内容
578	JM015	<u>副査が、「人名 20」先生なのかな?,,</u>
579	JM016	うん,,
580	JM015	<じゃあ>{<}\。
581	JM016	<多分>{>}そうだと思う。

4.3 用法 3：困惑を示し、相手の回答を間接的に求める

断片 3 は、アカペラに関する会話である。JM066 が自分はアカペラのベースのパートを担当していると話した後、JM057 は友達から「ベースは意外と奥が深い」と聞き（214 行目）、「なんかどうということなのかなって思って」（221 行目）と自分の困惑を述べている。そして、JM066 は 223 行目から 238 行目にかけて「奥が深い」理由を説明している。JM057 はただ心の中の困惑を述べたが、221 行目の発話は「奥が深いとはどういうことですか」という質問文に近い効力を持っている。なぜなら、相手の JM066 はベースのパートを担当しており、JM057 の疑問に答えるための知識を持っているという前提がある。そのため、JM057 は自分の困惑を示すだけでも、答えてもらえる可能性が高い。

断片 3 同性初対面雑談（男男）、会話番号 359-25-JM057-JM066

行番号	話者	発話内容
209	JM057	友だちがアカペラサークルに入ってて。
214	JM057	そっちなんですけど、なんか、ベースは意外と奥が深いぞって言ってきました。
中略		
221	JM057	<u>《少し間》なんかどうということなのかなって思って。</u>
222	JM066	どうでしょうね=。
223	JM066	=なんかベース《沈黙 2 秒》やっぱり人間の口で実際の弦ベースと同じ音出すと、かー、無理なの、で(あー、はい)、やっぱり基本的には、まあこれもう言葉とかほとんど関係なくなっちゃうから(<笑い>)あれなんですけどー<笑いながら>,,
中略（ベースの話）		
239	JM057	え、すごいなんか奥が深い<笑い>。

上述のように、疑問文は相手に応答を要求するため、相手の NF を脅かす。ポライトネスの原理には、「他者の負担を最小限にせよ」（リーチ 1983/1987,p.190）という項目があるため、対人コミュニケーションでは質問を明示的に示さないことが望ましい場合がある。会話参加者の二人は初対面であることを考慮に入れると、なるべく相手に負担をかけず、相手に回答などを

強制しない配慮がなおさら重要であろう。

用法2と用法3はいずれも「かな」を相手への質問で使用しているが、相違点として、用法2は「かな」を文末に使用し、「副査が〇〇先生なのかな？」のような形式で、疑問を明確に示す。それに対し、用法3は「かな」を文中に使用し、「どういうことなのかなって思って」のような形式で、内面の疑問・戸惑いを示す。そのため、後者の相手への働きかけはさらに弱いと考えられる。

4.4 用法4：主観的な考えを述べる

今回の調査において、主観的な考えを述べる際に使用される「かな」の件数(378件、45.3%)が最も多かった。例として、留学生生活に関する会話(断片4)を挙げる。319行目の発話で、話者JF021は留学について、「経験しておくといいかなとは思っていて…」と自分の意見を述べている。このように、自分の主張内容に「かな」をつけることで、発話を和らげることが可能になり、たとえ相手が異なる意見を持っていたとしても、双方の意見の相違を最小限に抑えることができる。意見表明に使われる「かな」は、リーチのポライトネスの原理「自己と他者との意見相違を最小限にせよ」(リーチ 1983/1987,p.190)を反映しており、人間関係への配慮を示している。

断片4 同性初対面雑談(女女)、会話番号021-02-JF021-JF022

行番号	話者	発話内容
312	JF022	<なんで>{>}、勉強はすべて、図書館でって(あー)感じでしたねー。
313	JF021	なんか、そういう生活ってすごい<笑い>。
314	JF022	いやー、でもなんか、留学なんかそんないいもんじゃないですよ。
315	JF021	なんか、そうですか?。
316	JF022	そうです<笑い>=。
317	JF021	=あー、なんか、楽しいことばかりではないだろうなどは<思います>{<}。
318	JF022	<うーん>{>}。
319	JF021	<u>ただ、やっぱり経験しておくといいかなとは思っていて...>{<}。</u>
320	JF022	<うーん>{>}。

4.5 用法5：相手の意見を完全に受容することができない態度を間接的に示す

断片5は、バトルに参加した経験についての会話である。話者JM007が336行目で「楽しかった過去の思い出」と自分の感情を話しているが、JM008は340行目で「楽しかったんかなー」と疑問を示し、342行目で「まーな」というためらいを伴う同意の応答を産出している。会話の流れからみると、「楽しかった」というJM007の主張に対し、JM008は否定的態度をとっていることは明らかである。しかし、JM008は否定的態度を明示せず、相手の主張を復唱して「かな」をつけ、反対意見を婉曲に表している。ポライトネス理論の観点からみると、これは相手の人に否定されたくないというNFへの配慮である。また、この用法も「自己と他者との意見相違を最小限にせよ」(リーチ 1983/1987,p.190)というポライトネスの原理を反映しており、相手への配慮を示している。

断片 5 同性友人同士雑談（男男）、会話番号 004-01-JM007-JM008

行番号	話者	発話内容
336	JM007	まー、そらー、まー、あの一、楽しかった過去の思い出で。
337	JM008	楽しかったんかどうか、分からんけど(<笑い>)。
338	JM007	や、楽しんでたじゃん。
339	JM007	それなりに。
340	JM008	<u>楽しかったんかなー。</u>
341	JM007	いろんなところ行ってさ、行ってさ。
342	JM008	まーな<軽く笑いながら>。

4.6 用法 6：客観的な事柄について、言い切れないことを述べる

断片 6 は、親戚の葬式についての会話である。438 行目の発話において、JM006 は亡くなった親戚のことについて「おば、おじいちゃんかな」と不確かな記憶を述べ、JM005 は「そうだよな」と同意を示している。ここの「かな」は、記憶の不確かさを示しながら、情報を相手に伝えている。Grice が提唱した協調の原理には、質の原則(maxim of quality)という規則がある。情報の不確かなところを隠し、それが相手に気づかれた場合、相手にマイナスな印象を与え、自分の人に認められたいという PF は侵害されてしまう。ゆえに、情報を伝える際の「かな」は、自分自身の PF を守るための戦略として機能している。このような使用は、長期的な対人関係の維持にもつながるため、配慮表現として捉えられる。

断片 6 同性友人同士雑談（男男）、会話番号 003-01-JM005-JM006

行番号	話者	発話内容
437	JM005	<だれか亡くなった、>{>}お葬式(そうそうそう)とか言って、すぐ帰っちゃったしさ。
438	JM006	<u>おば、おじいちゃんがかな。</u>
439	JM005	そうだよな。

4.7 用法 7：間違っていた認識を述べる

間違っていた過去の認識を述べる際、「かなと思った」、または「かなと思っていた」が使用される例は 16 件見られた。以下の会話例（断片 7）は話者 JM011 の北海道旅行の話である。398 行目で、JM011 は「まー、あの一、北方四島が見えるかなと思ったけど」と、野付半島に着く前の予想を述べている。しかし、最終的には「ちょっと見えなかった」（401 行目）。間違っていた認識を述べる際に「かな」をつけない場合、認識が間違っていたという事実が目立つようになり、発話者自身の PF が脅かされる。「かな」を使用することで、過去の認識自体があまりないものになったため、事実がそうであろうとなかろうと、自分の PF は脅かされない。したがって、間違っていた認識を述べる際に使われる「かな」は、自分自身の PF に配慮した表現として考えられる。

断片 7 同性友人同士雑談 (男男)、会話番号 006-01-JM011-JM012

行番号	話者	発話内容
398	JM011	<u>まー、あの一、北方四島が見えるかなと思ったけど。</u>
399	JM012	うん、そうだよね。
400	JM012	見えそうな<気もする>{<}>。
401	JM011	<ちょっと見え>{>}なかった。

4.8 用法 8 : 行動の意向を示す

断片 8 は、試験前の過ごし方についての会話である。275 行目で、話者 JM010 は「家に自分でいい、『いいいちこ』買おうかなって思った」と自分の意向を述べている。「かな」を使わず「動詞の意向形+思考動詞」という形式で述べた後、計画を実行できなかった場合、発話者自身の PF が脅かされる。そのため、意向を述べる際に使用される「かな」は発話を和らげ、行動に言質を与えないという用法を持っている。なお、「かな」の使用で意向をあいまいにすることができるため、相手との意見の相違を回避することも可能になる。これは、ポライトネスの原理「自己と他者との意見相違を最小限にせよ」(リーチ 1983/1987,p.190)を反映している。このように、意向の表出に使用される「かな」からも、対人関係の維持への配慮が見られる。

断片 8 同性友人同士雑談 (男男)、会話番号 005-01-JM009-JM010

行番号	話者	発話内容
273	JM009	飲みすぎやから。
274	JM009	また腹出るよ=。
275	JM010	<u>=だって、家に自分でいい、『いいいちこ』買おうかなって思った。</u>
276	JM009	<笑い>『いいいちこ』<笑いながら>[↓]。

4.9 用法 9 : 「自分の願望を表現する」(平山 2015,p.73)

断片 9 において、話者 JM014 は留学の情報を集めようとし、88 行目で「学校のホームページさ、とりあえずなんかないかなと思って、学校のホームページ見たら何にもないの」と述べている。JM014 は、「ないかな」の形式を用い、「ホームページに何かの情報があるといいな」という願望を表している。この用法について、平山 (2015,p.73) においても「自分でコントロールができない事態について願望を述べる際に、『かな』が用いられる」という指摘がある。一方、この用法において、配慮の働きは弱いと思われる。

断片 9 同性友人同士雑談 (男男)、会話番号 007-01-JM013-JM014

行番号	話者	発話内容
86	JM014	<そう>{>}、学校のホームページ見ても、何にも書いてないもんね。
87	JM013	うーん、学校がやれよな、そんなん。
88	JM014	うん、ほ、学校のホームページさ、 <u>とりあえずなんかないかなと思って、学校のホームページ見たら何にもないの、学校のページ。</u>

5. まとめ

本研究は、終助詞「かな」を切り口として、自問の言語表現に見られる配慮のあり方を考察した。具体的には、BTSJの会話データから「かな」の使用例を834件抽出し、その用法を「主観的な考えを述べる」「相手の意見を完全に受容することができない態度を間接的に示す」「客観的な事柄について、言い切れないことを述べる」「間違っていた認識を述べる」「自分自身に問いかける」「回答を強制しない質問をする」「困惑を示し、相手の回答を間接的に求める」「行動の意向を示す」「自分の願望を表現する」(平山 2015,p.73)にまとめた。分析結果から、自問の「かな」は発話者の意見や意向を和らげ、または相手に伝えようとする情報をあいまい化したり、自分自身の困惑を相手に示したりすることによって、相手、および相手との人間関係への配慮を表していることがわかった。このように、コミュニケーションにおいて、自問の言語表現は情報の要求や伝達、意見や意向の表明などの役割を果たし、配慮を示す戦略として活用されていると言える。

謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2124 の支援を受けたものです。

参考文献

- 池谷 知子 (2012) 「終助詞『つと』『つけ』の機能—『つと』『つけ』で表現される私的領域内情報と目に見えない聞き手—」『神戸松蔭女子学院大学紀要』15,11-25.
- 加藤 重広 (2015) 「発話的な効力と発話内的な効力—日本語の疑問形式を出発点に」加藤 重広 (編)『日本語語用論フォーラム 1』第 2 章、ひつじ書房、27-56.
- 櫻井 和美 (2015) 「独話的発話を用いた発話意図の表示の研究—配慮表現の観点から—」『日本語コミュニケーション研究論集』4,74-82.
- 林 淳子 (2020)『現代日本語疑問文の研究』くろしお出版
- 平山 紫帆 (2015) 「自然会話における終助詞「かな」の用法」『日本語教育実践研究』2,68-79.
- 三宅 知広 (2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- 山下 悠貴乃 (2012) 「依頼における文末形式「かな」「と思ったり」「と違って」の配慮表現としての機能について」『日本語コミュニケーション研究論集』2,119-127.
- ブラウン ペネロピ、スティーヴン C レヴィンソン (1987) 田中 典子 (監訳) (2011)『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』研究社
- リーチ ジェフリー (1983) 池上嘉彦・河上誓作 (訳) (1987)『語用論』紀伊國屋書店

調査資料

- 宇佐美 まゆみ監修 (2023)『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』科研基盤研究(A)「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」(研究代表者：宇佐美まゆみ)及び、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(2016~2021)